折々の犯罪

佐野 洋

人びとの死

蛇の夢
自然な方法
紙の罪
暗合の意味
非情な父
蛇の罠
晴か雨か

折々の犯罪

佐野 洋

講談社

初出一覧

しかし「不完全」――一九八八年五月号
蛸の夢――〃八月号
自然な方法――〃十月号
紙の罪――〃十二月号
暗合の意味――一九八九年二月号
非情な父――〃四月号
蛇の罠――〃六月号
晴か雨か――〃八月号

初出誌＝小説現代

折々の犯罪

定価一一〇〇円
（本体一〇六八円）

著者　佐野洋　企画編集・佐野企画

発行者　加藤勝久

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）

印刷所　慶昌堂印刷株式会社

製本所　株式会社大進堂

初版発行　一九八九年十一月十六日

© Yo Sano 1989, Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-204654-7　（文二）

目次

しかし「不完全」――7
蛸の夢――40
自然な方法――73
紙の罪――107
暗合の意味――133
非情な父――162
蛇の罠――189
晴か雨か――217

装幀　村山豊夫
写真　寺島彰由

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

折々の犯罪

三年前、小説現代に『折々の殺人』というシリーズを隔月連載した。これは、旧制一高時代からの友人大岡信の名著『折々のうた』の一部を借り、それに関連した短編ミステリーを書いたものであった。幸い、このシリーズは好評で、単行本になってからも、いくつかの書評欄で取り上げられもした。

その続編とでもいうべきものが、こんどのシリーズである。前回の『殺人』を『犯罪』と変えたので、ストーリーの範囲は、前より広がるかもしれない。

しかし「不完全」

さて又昨夕の浅葱染　あひが足らぬで濃く案じる

鄙廼一曲

「陸奥・宮城・牡鹿あたりの麦つき唄」として、『鄙廼一曲』に採録の近世歌謡。「あひ」は「藍」に「逢ひ」を掛ける。「濃く」は心深くで、「浅葱染」の「浅」と対照。浅葱色（薄い藍色）の染物の比喩を用いて恋の苦しみを歌う。「昨夜浅葱に染めた布は、藍が不足だったのがひどく気にかかる」というのが表の意味。「昨夜二人して浅葱に染まったが、逢う瀬があまりに浅かったので、悩みばかりが深い」というのが裏の意味。ひなびた感じが格別である。（大岡信　『第三折々のうた』・夏のうた）

ここでいう『逢う瀬が浅い』とは、どういうことなのだろう。
そう言えば、喫茶店で若い男女が、つぎのような会話を交わしているのを聞いたことがある。
「ことしになってから、まだ一度も会ってないのよ」
「え？　そうだっけ」
「そうよ。この前だって、そのつもりだったのに、食事だけで……」
この二人は、現に喫茶店で会っているのであり、食事を一緒にもしているらしい。それでも「ことしになって、会っていない」と彼女は言う。
どうも、この二人にとって、「会う」とはただ顔を合わせるだけではないらしい。
このように、現代でも『会う』という言葉には、いろいろな意味をこめることができるようだ。
とすれば、『逢う瀬が浅い』にも、多様な意味があっていいだろう。

田部は息を整えながら、冴子から離れた。足の方に丸められていた毛布を、胸のあたりまで引っ張り上げた。

その瞬間、冴子がかじりついて来た。田部の首に手を回し、からだ全体を押し付けるようにする。

田部は、戸惑った。これまで、ことが終わった直後に、冴子がこのような動作をしたことはない。田部も男だから、彼女のこんな態度が嬉しくないことはなかったし、腕に力をこめて、抱き返しもしたのだが、不審に思う気持も同じように、彼の中にあった。

「どうしたんだい？」

彼は、手で冴子のはだかの背中を撫でながら聞いた。

「……」

冴子は黙って首を振り、田部の腋に顔をこすりつける。田部自身は気がつかないが、冴子に言わせると、彼にはわずかに体臭があって、彼女はそれが好きだという。

『なぜか知らないけれど、とても懐かしい感じ……』

と、彼女は言ったことがある。

二週間ぶりだからなと、田部は考えた。その間、いかに肌淋しい思いをしたかということを、こんな動作で訴えようとしたのか。

冴子が、顔を彼の腋から離した。そのまま上を向き、田部の目に見入った。

「おれの顔に何か付いているかい？」
と、田部は聞いた。
「あたしね」
冴子は、首を振ってから言った。「もう終わりかと思っていたの」
「終わりって、何が？」
「あたしたちのこと……。だって、あなた電話もくれなかったし……」
「電話はしたじゃないか」
「あんなの電話の内に入らないわ。悪いけれど当分駄目だとか、眠くてしょうがないとか、一方的に言うだけなんだもの」
「しかしねえ」
田部は、言い聞かす必要を感じた。「刑事というのは、事件が起きたら、もう私生活なんかなくなっちゃうんだ。ことに、こんどは殺しだったからね。全員が、ずっと泊まり込みで……」
「それは知っているわよ。でも、やっぱり不安だったの。あなたが、あたしに倦きてしまったんじゃないか、なんて思って……」
「倦きるなんて……。どうして、そんなことを考えたのかな？　聞き込みしながらも、ふっと君のことを思い出し、ズボンが突っ張ることだってあるんだぜ」
言いながら、田部は冴子の手を取って、導いた。彼女は嬉しそうに握って来た。
「だって……。この前のとき、あなた何だか変だったもの。手抜きという感じ……」
「手抜き？　そんなことないだろう……」
そう言ったが、田部にも思い当たることがあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あの日は、昼間、調書の作り方について、係長の村瀬から、注意を受けた。
『女の子と付き合う暇があったら、先輩の作った書類でも読んで勉強するんだな』
そんな厭味を言われたことを、冴子を愛撫している最中に思い出してしまった。そして、それを忘れるために、すぐに彼女に挑みかかったのだ。冴子を燃えさせようと努力する余裕もなく、ただ終着点に向かって彼は急いだ……。それが、冴子には『手抜き』と思えたのか……。

翌日、署に出勤するとすぐ、田部は刑事課長の笹井のデスクに行き、捜査本部要員から解除された旨の申告をした。
「ああ、ご苦労だったな。若いのにいい勘をしていると、梶田部長が誉めていたよ」
笹井は、そう言って田部をねぎらってくれた。
梶田部長というのは、県警捜査一課の部長刑事だった。今度の殺人事件に際し、所轄署の刑事として、捜査本部に編入された田部は、ずっと梶田とペアーを組んで来た。
しかし、事件の方は、発生後二週間経っても、解決のめどが立たず、本部の規模が縮小され、所轄署員は全員きのう限りで、本部要員を外されたのだった。
田部としては、事件が解決するまで、本部詰めでいたい気持もあったが、上層部の方針である以上、文句は言えない。
「すっきりした顔をしているじゃないか。ゆうべ、早速彼女と会って、抜いて来たらしいな」
係長の村瀬が、自分の席から、田部をからかった。休みの日に、冴子と連れ立って歩いているところを村瀬に見られ、以来、村瀬はことあるごとに『彼女』を話題にする。

「ほう……。彼女ねえ。結婚するつもりなのか？」
と、笹井が聞いた。
「いいえ、まだそんな話はしていません」
田部は、赤くなって答えた。
「ふうん……」
笹井は、田部の答えに、ちょっと眉をしかめたが、それ以上の追及はしなかった。
警察官が結婚する場合は、一応上司に相談することになっている。冴子との結婚話を持って行ったら、笹井はどういうだろう。離婚経験のある年上の女で、しかもスナックに勤めていると聞けば、再考を求めるのではないだろうか。
田部は自分の席に帰った。何となく心が弾んでいたのは、笹井の言った『梶田部長が誉めていた』という言葉のせいかもしれない。
梶田は、来年は四十歳になるという。すでに七年間も県警捜査一課にいるベテランだった。
『おれたちは、もうロートルだから……』
などと自嘲的に言う癖があったが、聞き込みの技術には、さすが捜一の部長刑事だ、と何度も感心させられた。
その梶田が誉めてくれたというのが本当なら、田部にとっては嬉しいことであった。
しかし、田部はそれを手放しで喜んではいけないと知っていた。
刑事課長の笹井は、部下をおだてながら使うというタイプの上司だった。『梶田が誉めていた』というのも、田部をいい気持にさせるための創作なのかもしれない……。
正午近く、田部は、その梶田に出会った。捜査本部には、最初剣道の道場が当てられていた

が、規模の縮小とともに、会議室に移った。田部がその会議室の前を通ったとき、ちょうど梶田が出て来たのだ。
「やあ、どうだ？」
と、梶田が先に声をかけてくれた。「古巣に帰って、少しはのんびりしたか？」
「ええ、まあ……。きょうは？」
と、田部は聞いた。
「うん、ずっと、これまでの資料を読み返していた」
「何か、新しいことがわかりましたか？」
「……」
梶田は、だめだめというように、顔の前で手を振ってから聞いた。「君は、いま忙しいのか？」
「いいえ、きょうは別に……」
「そうか。じゃあ、ちょっと付き合えよ」
「はい、聞き込みですか？」
「そうじゃないさ。本部員でもないものを勝手に仕事に連れ出したりしたら、偉いさんに叱られる。コーヒー飲みにどうかと思ったのさ」
「いいですね」
と、田部は応じた。『偉いさんに叱られる』というのは、梶田の口癖らしかった。しかし、梶田は実際のところは、『偉いさん』を恐れてはいないようであった。捜査会議でも、田部が聞いていてはらはらするような大きな態度で、上司の見解に反対したりしている。

梶田に誘われたとき、田部の頭を過ぎったことがあった。ゆうべふと浮かんだ思い付きを、梶田に話してみようか……。

田部がこんな誘惑に駆られたのは、先刻笹井に言われた言葉のせいかもしれなかった。梶田が『勘がいい』と誉めていたと聞き、多少は自信めいたものも、生まれていた。

田部の内部にそんな気持があることが、表情や態度に現われたのだろうか。コーヒーが運ばれて来ると同時に、梶田が質問した。

「何か言いたいことがあるのじゃないか。あったら、遠慮なく言ってみろよ」

「ええ。実は、ちょっと考えたことがあるんです。大したことじゃないのですが……」

「それ、事件に関係あること?」

コーヒーにミルクを入れながら、梶田が聞き返す。

「はい。奥村氏の手帳に書いてあったことなんです」

「奥村の手帳? ああ、例の『しかし「不完全」』とかいうやつか……」

梶田は、すぐに応じた。ちょっと聞いただけで、相手の言いたいことを察してしまうという勘も、梶田は優れていた。

「ええ……」

奥村氏つまり奥村久一郎というのは、いま捜査本部が置かれている『雑木林内殺人・死体遺棄事件』の関係者の一人だった。いや、より具体的に言えば、被害者奥村広江の夫であった。

――その事件は、市の北東部にある雑木林の中から、女性の死体が発見されたことによって表面に出た。ちょうど半月前の五月二十日の早朝で、発見者は、山菜採りの主婦である。

死体は、半分以上が土に埋められていた。前日、かなり大量の降雨があったため、死体に被せた土が流され、その一部が外に出たものらしかった。

死体の身元は、すぐに判明した。死体そのものは、すでにかなりの腐敗状態を示していたが、着衣のワンピースにクリーニング店の縫い取りがついていて、そこから氏名が浮かんだのだった。

市内風見町二丁目の『風二マンション』に住む主婦奥村広江、四十歳。それが、死体の身元であった。彼女は、昨年の暮に歯の治療をしており、そのときにかかった歯科医のカルテも、死体が奥村広江であることを裏付けていた。

県内では二番目に大きな都市ではあるが、大きな犯罪はあまり起きていない。それだけに、発生当時は新聞やテレビが、かなり大袈裟に取り上げた。

もっとも、マスコミが騒いだのには、それなりの理由があったようだ。被害者の夫、奥村久一郎が、市内では一応の著名人だったのである。

奥村は、夫人とは五つ違いの四十五歳。もともとこの市の出身ではあるが、大学卒業後は東京の新聞社に勤めた。五年前、その新聞社を中途退職し、ここに戻って来て『ささやき』という喫茶店を開業、やがて週刊のミニコミ誌『街のささやき』を創刊した。

彼は『街のささやき』の巻頭に、毎号社会時評風のエッセイを執筆、それがきっかけで県内で発行されている日刊紙などにもエッセイを寄稿するようになり、地元UHF局制作のテレビ番組にも、ときどき顔を出したりしている。だから、この事件を報道するとき、新聞は奥村の肩書を『ミニコミ誌「街のささやき」主宰・評論家』と書いていた。

このような言わば『文化人』の妻が殺されたのだから、マスコミが大きく取り上げたのも当然

だろう。
奥村からは、妻の家出人捜索願が死体発見の四日前五月十六日に出されていた。しかし、それには『家出した日』として、『五月十三日夜（推定）』と書かれてあった。
この『推定』と、届がおくれたことについて、奥村はつぎのような説明をした。
「私は、喫茶店を毎晩九時までやっているのです。そのあと『街のささやき』の打ち合わせをするときもあるし、ほかから頼まれた原稿書きもしなければならない。そういうわけで、一週間の中、月曜から金曜までは、店の二階に泊まり込んでいるのです。それで妻がいなくなっていたことに気づかなかったというわけで……」
「じゃあ、奥さんとは電話で話すこともないのですか？」
と、捜索願を受付けた係官は聞いた。
「もちろん、お互いに用件があれば電話はしますよ。ところが、ここ何日か何度かけても留守だし、向こうからもかかって来ない。不思議に思って、マンションに帰ってみたところ、郵便物はボックスに入ったまま、さらに新聞受けもいっぱいになっている。それで、これはどうもおかしいということになったんです」
「それで、推定十三日というのは？」
「新聞が十三日の夕刊まで、部屋の中にあったことと、その日の夜、家内が友人と電話で話しているのです。ところが、十四日付けの朝刊は、取り出されていません。ですから、いなくなったのは、十三日の夜だろうと考えたわけです」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com